

外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(5)

北 條 礼 子*

(平成7年4月25日受理)

要 旨

1993年4月に、本学1年生197名を対象に、英語学習のどのような活動についてどの程度不安を感じているのか、英語で話すときに感じる不安の原因は何か、学生に不安を感じさせる教師の性格、態度にはどのようなものがあるか、学生は自分の英語力をどのように評価しているのかについてアンケート調査を実施した。その結果、学生は授業中皆の前で英語で話すことに強い不安を感じること、その主な理由は、間違ったり変なことを言って恥をかきたくないと思っているからであること、また、教師が親しみやすければ、学生はそれ程授業中不安を感じないですむこと、最後に自分の英語力に対する自己評価は全般的に低いことが明らかになった。

KEY WORDS

不安	anxiety	スピーキング	speaking
自己評価	self-evaluation	英語科教育	English education
語学教育	language education		

1. 研究の背景

筆者は日本人 EFL 大学生を対象として、外国語（英語）学習に対して学生が抱く不安に関連して継続的に研究を行ってきた。これまでに得られた知見のうち特徴的なのは、学生の学年や所属する大学が異なっても、授業中最も強い不安を感じる学習活動は、英語を話したり（衆目の面前で）書いたりするという、いわゆる生産的な学習活動であることであった。さらに、海外経験を有する以外の学生は、顕著に「話す」ことへの強い不安を示していた。そこで、学生の外国語（英語）学習における不安に関する研究をさらに深めるために、先回の研究において、自由記述により特に英語を話すことに対する不安の理由を検討した。

今回の第5回の研究では、これまでの一連の研究において被験者数が必ずしも十分といえなかったことを考慮し、まずより多人数の被験者を扱うことにした。次に、先行研究(Horwitz et al., 1986; 佐々木, 1993)と筆者によるこれまでの調査結果を基に、アンケートの調査項目について、項目数を付加するなど修正を加え、また調査項目の表現の一部を修正した。

また、学習者の自分自身に対する考え方が語学学習の態度や不安に影響を及ぼすことが報告されている (Horwitz, 1986; Phillips, 1992; Young, 1990)。そこで、日本人学習者の自分自

* 言語系教育講座

身に対する考えかたに関するデータを得るため、日本人学習者が自分の英語力をどのように評価しているのかについて、北條（1994）を参考に、自己英語評価に2項目を組み込み、同時に新たに5項目を作成した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、

- ①学生は英語学習のどのような活動についてどの程度不安を感じているのか、
 - ②英語の授業中、学生が皆の前で英語で話すときに感じる不安の原因は何か、
 - ③学生が授業で不安を感じるのは、教師がどのような性格を備え、またはどのような態度を取るときか、
 - ④学生は自分の英語力をどのように評価しているか、
- の4点を明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 被験者：本学1年次生197名

3.2 測定具：Ely（1986）、Young（1990）が用いた調査項目を参考にし、佐々木（1992）、北條（1993）の結果を加味した上で、筆者が日本人学習者が被験者であることを念頭において作成したアンケート。今回の調査では、具体的に以下の修正を行った。第2部は新たに8項目を加え28項目にし、第3部、第4部は1項目ずつを加え、それぞれ14項目、7項目とした。このうち、第2部、第4部は、佐々木（1993）の研究結果を参考にしたが、予め佐々木の了承を得た。また、表現を修正した第2部の1項目や第4部につけ加えた1項目はこれまでの継続研究から得られた結果を基にした。さらに、学習者が自分の英語力をどのように評価しているのかについて、北條（1994）を基に合計7項目を作成した。以上をまとめると、アンケートの構成は以下のとおりである。

第1部：学習者の英語学習状況、海外経験の有無などについての項目

第2部：英語の授業において学生が感じる不安に関する28項目

第3部：英語の授業中、皆の前で英語を話す際の不安の理由に関する7項目

第4部：学生に不安を感じさせる教師の性格、態度とはどのようなものかに関する14項目

第5部：学習者が自分の英語力をどのように評価しているのかに関する7項目

3.3 実験実施時期：1993年4月

3.4 手続き：約20分の実施時間で、集団で調査を行なった。記入は記名式として、2部から5部の内容に関する記述を提示し、5段階尺度で回答を求めた。回答は、2部と4部は「1：全く不安を感じない、2：あまり不安を感じない、3：どちらでもない、4：やや不安を感じる、5：非常に不安を感じる」の5段階であり、3部と

5部は「1：まったくそう思わない，2：あまりそう思わない，3：どちらでもない，4：ややそう思う，5：まったくその通りだと思う」の5段階であった。

それぞれ，1点から5点までの得点化を行なって，項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：分散分析

4. 研究の結果

4.1 アンケート第1部：北條（1993）の結果を参考にし，本研究の被験者は海外経験がある，と回答したもののでも全員3カ月以内の短期間であったので，海外経験による差はないものと判断し，一括して扱った。

4.2 アンケート第2部：英語の授業において学生が感じる不安に関する28項目

4.2.1 平均値・標準偏差

英語の授業において学生が感じる不安に関する28項目の得点をそれぞれ集計し，平均値と標準偏差を求め，平均値の高い順に項目を整理し直したものが表1である。

表1：英語の授業における不安に関する28項目の平均値と標準偏差（N=197）

順位		平均値	標準偏差
1 ※	突然英語で発言するよう指名される	4.59	0.72
2	授業中，皆の前で英語で話す	4.35	0.83
3	授業中，英語で意見を発表したり寸劇を演じる	4.24	0.85
4	準備してきた英会話を，授業中に全員の前で発表する	4.17	0.89
5	授業中，皆の前で，与えられた状況での役割を自発的に演ずる	4.01	0.92
6	授業中，英作文を書く	4.00	1.00
7	英語によるディスカッションに自主的に（強制的義務的にでなく）参加する	3.93	0.96
8	英語による質問を聞いて，その答えを英語で書く	3.92	0.90
9	答えを黒板に書く	3.87	0.96
10 ※	質問に対して指名されるのではなく自発的に答える	3.83	0.93
11 ※	role play（役割練習）を皆の前で発表する	3.81	1.03
12	教師の言ったことを一人だけで（全員ででなく）繰り返す	3.65	1.11
13 ※	2人1組で作った英会話を皆の前で発表する	3.60	1.02
14	家で英作文を書いてくる	3.46	1.11
15 ※	外国人教師と一緒に活動する	3.33	1.14
16	2人1組になってお互いに英語で質問し合う	3.31	1.04
17	2人1組になって，短い英会話を考えて作る	3.30	1.05
18 ◇	英語の教師の研究室で個人的に教師と話す	3.22	1.25
19	新聞や写真を参考にしながら英語の勉強をする	3.11	0.93
20	教科書の練習問題をする	3.10	0.95
21 ※	教師が学生全員を公平に指名する	2.91	1.01
22 ※	英語で発表する前に，口頭練習の機会を十分与えられる	2.85	1.02
23	3～4人のグループで練習する	2.57	0.96
24	授業中，グループに別れてゲームをし勝敗を競う	2.49	1.10
25	教師の後について繰り返す	2.41	0.94
26 ※	ビデオを見たりテープを聞いて学習する	2.29	1.00
27	授業中，英文を黙読する	2.05	0.99
28	授業中，英文を音読する（全員で）	1.88	0.92

※ 佐々木（1993）を参考に新しくつけ加えた項目

◇ 表現を変えた項目（北條（1993）実施の際，被験者より質問があったため「英語の」を付加）

4.2.2 分散分析の検定結果

英語の授業における不安に関する28項目の得点について、分散分析を行ったが、表2のとおりである。その結果、まず $F(27, 5292) = 153.26$ であり、1%レベルで有意であった。LSD法による多重比較の結果は表3のとおりである ($MSe = 0.67$, 5%水準)。なお、表3は理解しやすいように、全項目を得点の高い順に(学生が不安を感じる原因として強い順)に並べているが、表3の項目番号と内容は表1に対応している。

表2：分散分析表（英語の授業における不安に関する28項目）

要 因	SS	df	MS	F	p
条 件	2787.21	27	103.23	153.26	**
個人差	1832.78	196	9.35		
残 差	3564.54	5292	0.67		
全 体	8184.53	5515			** $p < .01$

表2、3より、学生は英語の授業中、「突然英語で発言するよう指名される」、「皆の前で英語で話す」、「英語で意見を発表したり寸劇を演じる」、「準備してきた英会話を、授業中全員の前で発表する」ことに強く不安を感じていることがまず明らかになった。その反面、「3～4人のグループで練習する」、「グループに別れてゲームをし勝敗を競う」、「教師の後について繰り返す」、「ビデオを見たりテープを聞いて学習する」、「英文を黙読する」、「英文を音読する（全員で）」という学習活動に対して不安を感じないで済むことが明らかになった。

4.3 アンケート第3部：英語の授業中皆の前で英語を話す際に不安を感じる理由に関する7項目

4.3.1 平均値・標準偏差

英語の授業中皆の前で英語を話す際に不安を感じる理由に関する7項目の得点をそれぞれ集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直したものが表4である。

4.3.2 分散分析の結果（7項目）

英語の授業中皆の前で英語を話す際に不安を感じる理由に関する7項目の得点について、分散分析を行ったが、表5のとおりである。その結果、まず $F(6, 1176) = 179.51$ であり、1%レベルで有意であった。LSD法による多重比較の結果は表6のとおりである ($MSe = 0.72$, 5%水準)。なお、表6は理解しやすいように、全項目を得点の高い順(学生が不安を感じる原因として強い順)に並べているが、表6の項目番号と内容は表4に対応している。

表5、6より、ここで取り上げた7項目は5%レベルで有意差がみられなかった箇所が2箇所あった。この結果を有意差がある箇所を>で図示すると、図1のようになる。つまり、「まちがったり、変なことをいって恥をかきたくない」>「とにかく皆の前で英語を話すのは理屈抜きでいやだ」>「先生に英語ができないと思われたくない」・「クラスメートに英語ができないと思われる」とプライドが傷つく」>「英語は得意なので、不安は感じない」のような関係になっていた。

2	*
3	* ns
4	* * ns
5	* * * *
6	* * * * ns
7	* * * * ns ns
8	* * * * ns ns ns
9	* * * * ns ns ns ns
10	* * * * * ns ns ns
11	* * * * * ns ns ns ns
12	* * * * * * ns
13	* * * * * * * ns
14	* * * * * * * * ns
15	* * * * * * * * * ns
16	* * * * * * * * * ns ns
17	* * * * * * * * * ns ns ns
18	* * * * * * * * * ns ns ns
19	* * * * * * * * * ns
20	* * * * * * * * * ns ns
21	* * * * * * * * * * *
22	* * * * * * * * * * ns
23	* * * * * * * * * * * *
24	* * * * * * * * * * * ns
25	* * * * * * * * * * * ns ns
26	* * * * * * * * * * * ns ns
27	* * * * * * * * * * * * *
28	* * * * * * * * * * * * *
	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27

順位		平均値	標準偏差
1	まちがったり、変なことをいって恥をかきたくない	3.97	0.90
2	とにかく皆の前で英語を話すのは理屈抜きでいやだ	3.51	1.13
3	先生に英語ができないと思われたくない	3.02	1.14
4	クラスメートに英語ができないと思われたくない	3.01	1.13
5	先生に英語ができないと思われるとプライドが傷つく	2.40	1.01
6	クラスメートに英語ができないと思われるとプライドが傷つく	2.39	1.03
7 ※	英語は得意なので、不安は感じない	1.52	0.79

※新しくつけ加えた項目（北條（1993）とHorwitz et al.（1986）の研究結果を参考にした）

順位		平均値	標準偏差
1	(授業中) 学生に英語で発言するように励ます	2.95	0.98
2	学生をほめる	2.58	0.87
3	忍耐強い	2.51	0.83
4	面倒みのよい	2.32	0.82
5	いつも笑顔で学生に接する	2.10	0.88
6	(教師の態度が) 緊張しないでリラックスしている	2.07	0.86
7 ^a	教材について十分説明する	2.04	0.80
7 ^b	公平である	2.04	0.81
9	学生を緊張させない	1.81	0.77
10 ^a	ユーモアのセンスに富む	1.79	0.74
10 ^b	理解のある	1.79	0.68
12	助けてくれる	1.77	0.67
13	堅苦しくないリラックスした雰囲気を作る	1.73	0.72
14	親しみやすい	1.61	0.69

表 8：分散分析表（学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する 14 項目）

要 因	SS	df	MS	F	p
条 件	384.52	13	29.58	76.98	**
個人差	979.05	2548	0.38		
残 差	780.88	196	3.98		
全 体	2144.45	2757		**	p<.01

2	*
3	* ns
4	* * *
5	* * * *
6	* * * * ns
7 ^a	* * * * ns ns
7 ^b	* * * * ns ns ns
9	* * * * * * *
10 ^a	* * * * * * * ns
10 ^b	* * * * * * * ns ns
12	* * * * * * * ns ns ns
13	* * * * * * * ns ns ns ns
14	* * * * * * * * * * * ns

* p < .05

4.5 第5部：学習者が自分の英語力をどのように評価しているのかを質問する項目

4.5.1 平均値・標準偏差

学習者が自分の英語力をどのように評価しているのかを質問する7項目の得点をそれぞれ集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直したものが表10である。

表10：学習者の自己英語力評価 (N=197)

順位		平均値	標準偏差
1 ☆	英語の質問に英語で答えるとき、いつもあがってしまい、うまく答えられない	4.12	0.99
1 ☆	私は、もう少し英語を勉強すればもっと英語ができるはずだと思う	3.64	1.10
3	私は英語を読む力はある	2.02	0.97
4	私は英語は得意である	1.83	0.97
5	私は英語を書く力はある	1.75	0.86
6	私は英語を聞く力はある	1.72	0.83
7	私は英語を話す力はある	1.50	0.69

☆ 北條 (1994) を参考に、自己英語力評価に組み込んだ項目、項目3～7は新たに作成した項目

4.5.2 分散分析の結果 (7項目)

表11：分散分析表 (学習者の自己英語力評価に関する7項目: N=197)

要 因	SS	df	MS	F	p
条 件	1306.30	6	217.72	340.35	**
個人差	752.27	1176	0.64		
残 差	424.55	196	2.17		
全 体	2483.12	1378		**	p<.01

学習者が自分の英語力をどのように評価しているのかを質問する7項目の得点について、分散分析を行ったが、表11のとおりである。その結果、まず $F(6, 1176) = 340.35$ であり、1%レベルで有意であった。LSD法による多重比較の結果は表12のとおりである ($MSe = 0.64$, 5%水準)。なお、表12は理解しやすいように、全項目を得点の高い順(学生が不安を感じる原因として強い順)に並べているが、表12の項目番号と内容は表10に対応している。

表11, 12より、ここで取り上げた7項目は3箇所間に5%レベルで有意差がみられなかった。つまり、以下の図2のようになるが、有意差がある箇所を>で表すと、「英語の質問に英語で答えるとき、いつもあがってしまい、うまく答えられない」>「私は、もう少し英語を勉強すればもっと英語ができるはずだと思う」>「私は英語を読む力はある」>「私は英語は得意である」・「私は英語を書く力はある」・「私は英語を聞く力はある」>「私は英語を話す力はある」という関係になっていた。

表 12：LSD法による多重比較の結果（学習者の自己英語力評価に関する 7 項目）

2	*					
3	*	*				* p<.05
4	*	*	*			
5	*	*	*	ns		
6	*	*	*	ns	ns	
7	*	*	*	*	*	*
	1	2	3	4	5	6

英語を話す
時、あがつ
てしまう

>

勉強すれば
もう少し英語
ができるはず

>

読む力は
ある

>

英語は得意
書く力はある
聞く力はある

>

話す力は
ある

5. 研究の考察

5.1 学生は英語学習のどのような活動についてどの程度不安を感じているのかについて：

本研究の結果をみると、「突然英語で発言するよう指名される」、「皆の前で英語で話す」、「英語で意見を発表したり寸劇を演じる」、「準備してきた英会話を、授業中全員の前で発表する」ことに強い不安を感じていることがまず明らかになった。一方、「3～4人のグループで練習する」、「グループに別れてゲームをし勝敗を競う」、「教師の後について繰り返す」、「ビデオを見たりテープを聞いて学習する」、「英文を黙読する」、「英文を音読する（全員で）」という学習活動に対して不安を感じないでいられると答えていた。以上から、突然であれ、予め準備をしてあるにせよ、皆の前で英語を話すことに強い抵抗があり、3～4人以上のグループ活動や視聴覚教材を用いた学習という、個人的に目立たない学習には抵抗感がないという学生の姿が判明した。以上の結果は、欧米での先行研究（Horwitz et al., 1986；Young, 1991）が授業中の不安について指摘しているように、単に英語を話すという活動ではなく、「グループの前で学習中の言語を話す」活動が不安の最大の原因であるという結果を改めて支持するものであった。しかし、本研究結果をみると、予め準備をしている場合でもなお不安を感じている点が、日本人学習者の特徴として指摘できよう。

5.2 英語の授業中他の学生の前で英語で話すときに感じる不安の原因について：

本研究の結果をみると、学生は英語の授業中、他の学生の前で英語で話すときに感じる不安の第一の原因として、学生は「まちがったり、変なことをいって恥をかきたくない」ことをあげていた。第二に、平均値はあまり高くはないが、英語を話すこと自体にとにかく抵抗を感じていることがわかった。第三に、教師やクラスメートに自分が英語ができないと思われたくないという気持ちの方が、自分のプライドが傷つくから、という気持ちより強いことも明らかになった。以上より、学生は、教師やクラスメートに自分がどのようにみられるかという、他者との関連という観点から不安を覚えている傾向がみられた。言い換えると、自分のプライドが傷つくから、といういわば主観的な捉え方より、他者にとって自分がどのように判断されるのか、が不安を覚える理由になっているものと推測される。なお、この結果は北條（1994）と全く同様であった。

5.3 学生の不安を強める教師の性格や態度はどのようなものかについて：

本研究の結果から、教師が授業中学生に英語で発言するように励ましたり、学生をほめたり、また教師が忍耐強かったり、面倒みがよかったりすると、特に強い不安を感じるわけではないが、落ち着かなくなる傾向があることがわかった。この結果は、これまでの筆者による研究結果（1992, 1993a, 1993b）とほぼ同様であった。また教師が「学生をほめる」と学生が不安を感じやすい、という結果が一貫して得られていることは、英語教師にとって一考に値するものであろう。

5.4 学生は自分の英語力をどのように評価しているかについて：

本研究の結果から、学生は「英語を話すとき、いつもあがってしまい、うまく答えられない」と感じていることが明らかになった。また、平均値をみるとそれほど高い値を示していないことから、学生は必ずしも「勉強すればもう少し英語ができるはずだと思う」とはいえないことも判明した。さらに、いわゆる英語の4技能についての自己評価は、「読む」>「書く」・「聞く」>「話す」の順になっていたが、「読む力がある」の平均値がかなり低く、全体的に、学生は自分の4技能が低いと感じていた。以上の結果は Young (1990) が指摘するように、自分自身を低く評価することが、授業中不安を感じてしまうことに結びつく結果になっていると推測される。

6. 今後の課題

筆者はこれまで、英語を話す活動を中心に据え、学生が英語の授業中にどのような学習活動に対して、どの程度不安を感じるのかについて調査を行ってきた。今回の結果を含め、ある程度まとまった知見が得られたので、これから語学学習における不安に深く関わりと報告されている language belief (Dolly, 1991, p.428) との関連についても研究の範囲を広げたい、と考えている。

引用・参考文献

- Brown, H. Douglas (1994) *Principles of Language Learning and Teaching* (Third Ed.)
Prentice Hall Regents
- Ely, Christopher M. (1986) "An Analysis of Discomfort, Risktaking, Sociability, and Motivation in the L2 Classroom," *Language Learning*, Vol.36, No. 1, pp. 1-25.
- 北條 礼子 (1992) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(1)」
上越教育大学研究紀要 第12巻第1号 53～64頁
- _____ (1993a) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(2)」
上越教育大学研究紀要 第12巻第2号 409～421頁
- _____ (1993b) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(3)」
上越教育大学研究紀要 第13巻第1号 239～251頁
- _____ (1994) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(4)」
上越教育大学研究紀要 第13巻第2号 351～362頁

- Horwitz, Elaine K., Michael B. Horwitz & Joann Cope (1986) "Foreign Language Classroom Anxiety," *Modern Language Journal*, Vol. 70, No. ii, pp. 125-132.
- Phillips, Elaine M. (1992) "The Effects of Language Anxiety on Students' Oral Test Performance and Attitudes," *Modern Language Journal*, Vol. 76, No. i, pp. 14-26.
- Samimy, Keiko K. & J. P. Rardin (1994) "Adult Language Learners' Affective Reactions to Community Language Learning : A Descriptive Study," *Foreign Language Annals*, Vol. 27, No.3, pp. 379-390.
- 佐々木 郁夫 (1993) Anxiety, Motivation, and Language Proficiency of Japanese EFL Junior High School Students. 上越教育大学大学院修士論文
- Young, Dolly J. (1990) "An Investigation of Students' Perspectives on Anxiety and Speaking," *Foreign Language Annals*, Vol. 23, No. 6, pp. 539-553.
- _____ (1991) "Creating a Low-Anxiety Classroom Environment : What Does Language Anxiety Research Suggest?" *Modern Language Journal*, Vol. 75, No. iv, pp. 426-437.

A Study of Students' Anxiety over Classroom English (5)

Reiko HOJO *

ABSTRACT

In this study, questionnaire items have been improved with one item being rewritten and some others being newly introduced. This was done based on the results obtained from previous studies by both other researchers and the author.

The purposes of this study are to find out : 1) how much anxiety students feel toward typical learning activities in English classes ; 2) what the reasons are students feel anxious about speaking activities in the classes ; 3) what kinds of characteristics and attitudes students expect teachers to have so that students feel less anxious ; 4) how students evaluate their own English abilities.

Data were gathered from 197 Japanese university freshmen, using a revised questionnaire, which was administered in April of 1993. The data were analyzed by ANOVA.

The results revealed that 1) students felt most anxious when speaking English in front of their classmates ; 2) students were most afraid of getting embarrassed by making mistakes in speaking English ; 3) students felt less anxious when teachers were friendly, while feeling more anxious when teachers directly encouraged them to speak in English or praise them ; 4) students felt that they couldn't answer in English because they were so nervous when called on to answer questions in English.

* Division of Languages : Department of Foreign Languages